

緩和ケア普及啓発に関する活動報告書

提出日 平成 29 年 3 月 31 日

緩和ケア普及啓発活動についての報告

| | |
|--|--|
| 実施団体 | |
| 特定非営利活動法人 日本緩和医療学会 厚生労働省委託事業 緩和ケア普及啓発活動 | |
| 企画名 | |
| 平成 28 年度 市民公開講座『「緩和ケア」があたりまえの世の中になるように ～緩和ケアとは、病気に伴う心と体の痛みを和らげること～』 | |
| 事前告知、募集の方法について(ポスター、チラシの配布など) | |
| 公式ホームページ及び Facebook での事前告知、学術大会での告知ちらし配布、 新聞・公式ホームページでの告知記事掲載とメール・はがき・FAX による応募募集、 関東のがん診療連携拠点病院でのちらし配布 | |
| 当日の実施内容について | |
| 日時(期間) | 2017 年 2 月 12 日(日) 11:00 ~13:20 |
| 実施場所 | 丸ビルホール〔東京都千代田区丸の内 2-4-1 丸ビル 7 階〕 |
| 参加人数 | 定員 400 名… 一般市民、参加費無料 応募者数 617 名… WEB 281 名、FAX 139 名、はがき 197 名 参加者数 369 名… WEB 170 名、FAX 86 名、はがき 109 名、当日 4 名 |
| 具体的な実施内容： | |
| <p><プログラム></p> <p>1. 講演</p> <p>I. 「緩和ケアとは? ~ 疾病と共に健やかさを生きるために」 有賀 悦子氏 (日本緩和医療学会 副理事長/帝京大学医学部緩和医療学講座 教授・診療科長)</p> <p>II. 「生活と共にある緩和ケア」 波多江 優氏 (相模原協同病院患者総合・がん相談支援センター センター長 がん看護専門看護師)</p> <p>III. 「仕事とお金に関する問題を解決するには」 菊池由生子氏 (東京都立駒込病院医事課医療相談担当 課長代理・ソーシャルワーカー)</p> <p>2. ディスカッション「緩和ケアがあたりまえの世の中になるために」</p> <p>座 長 : 下山 理史氏 (国立病院機構 名古屋医療センター緩和ケア科 医長) 池永 昌之氏 (淀川キリスト教病院 緩和医療内科 主任部長)</p> <p>パネリスト: 天野 慎介氏 (一般社団法人 全国がん患者団体連合会 理事長) 有賀 悦子氏・波多江 優氏・菊池由生子氏</p> | |

< 展示他 >

- ・ホワイエ：街頭イベント〔北海道札幌市〕で作成した、緩和ケアの過去・現在・未来パネル展示、緩和ケアに関する資料の展示・配布
- ・動画上映：今年度製作した普及啓発動画の上映（講演開始前・休憩時間）

効果について（アンケートの結果など）

《アンケートでの意見（抜粋）》

- ◆ 参加者の過半数はご本人やご家族・知人等が緩和ケアを受けた方や現在受けている方で、切実な意見を多数いただいた。過去に緩和ケアを受けた方やご家族が受けた方が、それが正しかったのか、またはご家族にもっと緩和ケアを受けさせたかったと悩み、緩和ケアについて知りたいと考えて今講座に参加いただいた方が多く見受けられた。
- ◆ 今講座への参加を通じ緩和ケアは終末期医療ではなく、がんと診断された時から受けるものだと理解したという意見が多く、1人でも多くの方がより良い緩和ケアを受ける一助となれた一方、現在も緩和ケアについて誤解している方へのより一層の普及啓発活動が必要だと言える。
- ◆ 参加者からは、終末期の痛みをとるだけでなく診断時からの心と体の痛みを和らげる緩和ケアを、患者さんご家族も当たり前を受けることを広めたいという意見や、知ることは不安を和らげるという前向きな意見があった。
- ◆ 病院間や病院・ホスピス間の連携が悪く転院等に時間を有したり、病院によっては緩和ケアへのアクセスが悪く緩和ケアを受けられなかったという声があった。またホスピスを経済的に恵まれた人の場所だと誤解していたり、心の痛みが取れる専門家へのアクセスを知りたいという声があった。
- ◆ 患者さん自ら伝えたり学ぶ意識も大切だが、多くの方がスムーズに緩和ケアを受ける最も有効な方法は主治医が緩和ケアを正しく理解することで、主治医を含め医療従事者への一層の教育が重要という意見が多数あった。
- ◆ 緩和ケアをより知りたいと考える医療従事者にも、多数参加いただいた。地域連携が更に重要になるが訪問医療や訪問看護を知らない方が多いという声や、在宅療養やターミナルケア・スピリチュアルケアの知識を求める声があった。相談先が以前より充実していることを知り安堵したという声や、治療中の患者さんの家族・友人で生活上の悩みを相談しても問題ないかという声があった。
- ◆ 緩和ケアの具体的な例や、患者さんの言葉を聞きたいという意見が多数寄せられた。緩和ケアを受け自宅で一人生活することもできると言われるが、二人に一人ががんになる時代どの程度実現できるのかという意見をいただいた。
- ◆ がん以外にも多くの苦しい病気があり、がん以外にも緩和ケアを広めて欲しいという意見も多数いただいた。実際がんと告知された時に段取りよく行動できるのか、がんと診断がくだされる前に不安になる気持ちやがんになった時の心の持ちようや心構えなど知りたいという声があった。
- ◆ 多数の参加者からは概ね好意的な意見や、地方都市でも市民公開講座を設けて欲しいという声をいただいたが、10周年としては基本的な講演内容だという意見と、専門用語が多くわかりにくいという意見をいただいた。またスライドが見にくいので資料が欲しい等の意見や、専門用語が多くわかりにくいという意見をいただいた。
- ◆ 今はまだ患者ではなく家族も病気ではないが、緩和ケアを理解できて気持ちが楽になったという意見があった。社会人になる前や社会人になる若者が、医療を含めた社会制度について知る場が必要という声や、参加者が他の人に伝えていくことも大切という声をいただいた。

その他報告

申し込み多数により締切前に受付を締め切り、当日は事前申込者の約6割に参加いただいた。会場前に早くから並ぶ姿や講演を熱心に聞く姿から、緩和ケアへの興味・関心の高さが伺えた。

基調講演では医師・看護師・医療社会福祉士という職種ごとの事例を示し、市民にわかりやすい内容の講演を目指した。後半のディスカッションは患者会代表者にも参加いただき、来場者から事前に集めた質問に応える形式で展開した。医療従事者だけでなく患者・家族などの市民の意見や疑問を議論に取り入れることで、双方向の意見交換の場とし緩和ケアを身近に感じていただけたと思われる。

また講演前や休憩時間に今年度製作した普及啓発動画を上映することで、緩和ケアは必要な時にいつでも受けられることを知っていただけるように工夫した。ホワイエの資料ブースでは資料を持ち帰る方や、札幌市の街頭イベントで作製したパネルを見て質問する方が多数見受けられ、講演以外にも有益な情報を得られる工夫をして、来場者の更なる緩和ケアへの理解を促した。

● 当日の写真

